

〔原著〕

## 2年課程の看護学生の学びの特徴 —思考力を高めるための試行的な授業における学生の反応から—

岡田 摩理<sup>1)</sup> 服部 律子<sup>2)</sup>

### Learning Characteristics of Nursing Students in a Two-Year Course: Student Responses in a Trial Class for Enhancing Thinking Ability

Mari Okada<sup>1)</sup> and Ritsuko Hattori<sup>2)</sup>

#### 要旨

2年課程の看護学生の思考力を高めるために試行的な授業の工夫を行い、その授業における学生の反応から、2年課程の学生の学びの特徴を見出し教育方法を検討することを目的とした。

日常生活援助技術を学ぶ基礎看護学の授業において、学生が科学的な根拠に基づいて援助を考える力をつけることと自ら調べ主体的に学ぶ力を向上させることを目的として授業の工夫を行った。その授業において教員が観察した学生の言動と、毎回の授業終了後に学生が感想や質問等を自由に記載する「授業評価」の記述内容の中から、学生の学びや学習に関する姿勢・気持ちが書かれた内容を抽出しデータとし、内容から類似するものを分類し分析した。

学生の言動と「授業評価」の記載において、それぞれ7つのカテゴリを見出した。これらのカテゴリから、学生の学びの特徴を4つ見出し、特徴に合わせた教育方法を検討した。一つ目は、手順を中心に援助方法を考えたり、成果が得られにくい学習方法が目立つが、学習過程で振り返ることができることであった。入学後初期に考え方の修正と適切な学習方法の指導が必要である。二つ目は、学習に対して様々な困難を感じることであるが、知識の理解や活用、言葉の理解や表現などに丁寧に時間をかけて継続的に指導することが必要である。三つ目は、学習の成果を得ることができ、学習過程で楽しさを感じ、学習への意欲を持つことであり、日常的に活用できるように、より臨床を意識した教育の工夫が必要である。四つ目は、特定の学習方法に対し、特に学ぶことができたと感じることであり、グループ学習や体験学習などによる学びが大きい。2年課程の学生は、働きながら学習する学生が多く、社会人学生は社会的スキルが高いこともあり、他者からの学びや体験的な教育方法が有効である。

**キーワード**：2年課程、看護基礎教育、日常生活援助技術、思考力、教育方法

#### I. はじめに

看護基礎教育は、過去の歴史的経過から多様な養成課程があるが、近年は高校卒業後4年間の大学教育が主流となりつつある。しかし、未だ様々な養成課程があり、准看護師から看護師資格を取得する2年課程も存在して

いる。全国的には、2年課程の看護専門学校は減少しているが（日本看護協会, 2012）、平成24年看護師国家試験の新卒合格者の約1割を占めており（厚生労働省, 2012）、教育の在り方を考える必要はある。

2年課程の教育は、准看護師として学んだ内容を踏ま

1) 東濃看護専門学校 Tono Nursing School

2) 岐阜県立看護大学 育成期看護学領域 Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

え、観察力・判断力・問題解決能力を強化し、臨床で応用可能なものとして学習することとされている（門脇ら、2012a）。そのため、准看護師教育で習得した看護に必要な知識の上に積み重ねの教育を行うという考え方のもとに行われている。しかし、実際に2年課程の教育に携わり、実習や演習時の学生の看護援助を見ていると、単なる積み重ねの教育では不十分ではないかと危惧を抱くようになった。入学時の知識・技術の習得度の差が大き以上に、技術の根拠の理解が不十分で、入学前に身につけた自己流の看護援助が目立ち、その考え方の修正が困難であったためである。学習時には、自分で考える前に教員に正解を求めたり、対象の状況に合わないパターン的な看護が度々見られ、一から教えるよりも困難ではないかと感じるがあった。

先行文献においても、肥後ら（1995）や金城ら（2003）が、2年課程の学生の技術習得度やアセスメント力に於ける差が大きいことを述べている。また、鈴木ら（2001）や松本（2010）は、2年課程の学生は、マニュアル的な手技は出来ても根拠や予測性が不足し、対象者の状況に応じた技術が難しいという点を指摘している。これらの要因の一つには、准看護師教育の影響が考えられる。林（2009）は、准看護師教育は、教育時間数や教育課程の内容の不足から、質・量ともに不十分な教育であることを指摘している。少人数の教員による短時間の教育では、看護技術の意味を考えるよりも、技術の型として覚えざるを得ない。更に、准看護師は、医師、歯科医師または看護師の指示のもとに業務を行う立場にあり、准看護師教育では安全、安楽な手順で正確に技術を実施することが重視されている（門脇ら、2012b）。そのため、知識をもとに技術を工夫したり、患者の状況をもとに論理的に考え判断をする教育が行われることは少ない。2年課程の学生が、患者に合わせた看護援助を、一定の状況に合わせてパターン的に行う傾向にあってもやむを得ないと思われる。

また、2年課程昼間定時制の学生は、働きながら学ぶ学生が多数を占める。職業人と学生という役割を抱えての学習は、物理的・心理的な負担も大きい。知識や技術を学習する過程においても様々な影響がある。末永（2011）は、准看護師として現場で求められてきたことが影響し、実務経験のある学生には自己流の簡略化した看

護ケアがみられることを示している。吉田ら（2009）は、学校で学ぶ技術と職場で実践する技術を区別している学生の存在を指摘している。これらの研究では、根拠に基づいた看護の学習をしても、日常的に自己流の看護ケアを行う実務経験を繰り返すことで、学生の学びが阻害される可能性を示唆しており、実務経験をプラスにするような教育の工夫の必要性が述べられている。

このように2年課程の学生には、准看護師教育や実務経験が影響し、3年課程とは異なる特有の学びの特徴がある。パターン的な看護を脱し、自ら看護を考えていく力を身につけなければ、准看護師から看護師になることは難しい。そのためには、准看護師課程で学んだ看護を裏付ける科学的根拠となる知識を自ら追及し深め、論理的・多角的に看護を思考する力を高める必要がある。先行研究では、山内ら（1997）・高井ら（2001）・高橋ら（2001）が、2年課程の学生の状況を踏まえ、学生の思考過程に働きかける教育の工夫を報告している。これらの研究は、2年課程の学生が技術を深く学習し直し、看護を考える力を育成する教育の工夫であるが、試行的な授業の工夫に対する評価に留まっており、2年課程の学生の学びの特徴を明確にして働きかけてはいなかった。思考力を高めるための教育方法を見出すためには、2年課程の学生の学びの特徴を捉えることが必要であると考えた。

そこで、2年課程の看護学生の思考力を高めるための試行的な授業を行い、授業における学生の反応として学生の言動の観察および学生の授業後の記載から、2年課程の看護学生の学びの特徴を見出し、必要な教育について検討することを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 対象者

A看護専門学校（2年課程昼間定時制3年間履修）の1年次生37名中、成績確定後に同意を得た37名の学生

### 2. 思考力を高めるための試行的な授業の対象科目

入学後初期に日常生活援助技術を学ぶ「基礎看護学方法論Ⅰ」を対象とした。これは、准看護師課程で学習した技術を、根拠を踏まえて学び直す最初の科目であり、複数の教員が関わって学生の思考過程に働きかける科目である。そのため、看護基礎教育における2年課程の学

生の学びの特徴を見出しやすいく考えた。

### 3. 用語の定義

「思考力を高める」とは、本研究において、科学的な根拠を基に看護を考える力と根拠を得るために自ら調べ主体的に学ぶ力を向上させることとする。これは、看護を考えていくためには、自主的に文献を調べ、知識を活用して看護を追及していく学習力が必要であると考えためである。

### 4. 思考力を高めるための試行的な授業の実践方法

「思考力を高める」ことを意図した授業方法を取り入れた試行的な授業を計画した。講義とグループワーク及び時間外の技術練習を担当した教員は2名、演習を担当

した教員は8名である。授業の内容及び構成は表1に示した。基礎看護学方法論Ⅰは15回30時間の科目である。全ての援助項目を学習する時間はないため、実習で学生が援助する機会の多い活動・運動、環境、清潔・食事の項目を取り上げた。また、准看護師課程で既習の基本技術のうち、前記項目に関連する4つの技術の習得度を確認する演習時間を科目の30時間外で行うこととした。

#### 1) 授業の目標

科目の目標を「日常生活援助技術を単なる手順としてではなく、科学的な根拠に基づく技術として理解し行動化できること」「患者の日常生活を困難にする要因を考え、個別性のある援助方法を考えること」とした。また、

表1 基礎看護学方法論Ⅰ 授業内容

回数	時間	項目	授業のねらい	授業形態
1回目	90分	【看護の方法と技術】	看護技術とは何かを考え、この科目の学習方法を理解できるようにする	講義
2回目	90分	【効率的で安楽な動きを作り出す技術】	力学的な根拠を踏まえてボディメカニクスの技術ができるようにする	講義 グループワーク
3回目	90分	【活動・運動を援助する技術】	活動運動の意義を理解し、活動運動のニーズをアセスメントするための視点を理解できるようにする	講義 グループワーク
4回目	90分	【ボディメカニクスグループ演習】	力学的根拠に基づいた安全で効率的な体位変換・車椅子移乗ができるようにする	グループ演習
5回目	90分	【快適な療養環境を作る技術】	療養環境を整える援助のアセスメントの視点を理解して、患者の状況に合わせた援助を考えることができるようにする	講義 グループワーク
6・7回目	180分	【臥床患者のシーツ交換】	患者に応じた療養環境整備の一つの援助として、事例を用いたシーツ交換の実施を行い、記録し振り返ることができるようにする	グループ演習
8回目	90分	【清潔の援助技術】	清潔の意義を復習し、清潔のニーズのアセスメントの視点がわかり、清潔の援助方法を選択するための考え方が理解できるようにする	講義 グループワーク
9回目	90分	【清潔の援助技術のグループワーク】	事例に合わせた援助方法を自己にて考え、それをもとにグループで討議し、更に援助を工夫することができるようにする	グループワーク
10・11回目	180分	【臥床患者の背部清拭と寝衣交換】	自分が考えた援助方法を実際に行い、実施結果を記録、振り返りができるようにする	技術試験
12回目	90分	【清潔の援助技術の振り返り】	個人の振り返りをグループで意見交換し、援助方法を導き出す考え方を再確認し、患者に合わせた援助の工夫をする考え方を理解できるようにする	講義 グループワーク
13回目	90分	【食事・栄養の援助】	食事の意義やアセスメントの視点を理解し、事例に合わせた援助を考えることができるようにする	講義 グループワーク
14回目	90分	【食事・栄養の援助】	個々で考えてきた援助方法をグループで検討し、更に援助を工夫することができるようにする	グループワーク
15回目	90分	【試験とまとめ】	科目全体のまとめとして、考え方を学ぶことができたか確認する	試験

科目時間以外に准看護師課程の学習の復習として、「車いす移送」「ベッドメイキング」「足浴と寝衣交換」の基本技術の演習を行った。

思考力を高めるためには、自ら学習する力を育てることも必要であることから「主体的な学習方法と基本的な援助技術の実践能力を身につける」ことも加えた。

## 2) 授業方法

(1) 准看護師課程の復習を行う中で、基本的な技術の根拠の理解を深める

日常生活援助の基本技術は、准看護師課程で既習であるが、習得度が様々であるため、毎年習得度確認の演習を行っている。今回は、この演習に取り組む過程で、技術の根拠を深めることとした。根拠を理解することが技術の向上につながることを意識づける指導を練習時に行った上で、習得度を確認する技術チェック（習得度確認テスト）を行った。

(2) 援助技術を考える過程を明確にして指導する

援助を行う際には、基本的な技術の根拠を踏まえるとともに、事例の状況に応じて援助方法を工夫する必要があることは准看護師課程でも意識づけられている。しかし学生によって学び方が様々であるため、患者状況を把握する考え方を明確に示し、どの教員も同じ視点で指導するように共通理解をした。そして、基礎的な知識も理解できるよう丁寧に説明することとした。

(3) 学生が自ら調べ考えることができるように指導を行う

授業では、教員が一方向的に教授するのではなく、既習の知識を活用して援助技術を考えるように、自ら調べ考える課題、演習、グループワークを取り入れた。練習や演習の指導場面においても、考えさせる発問や教科書の確認を一緒に行うなどの学習方法についての指導方法も教員間で統一して行うようにした。

3) 授業の実施期間

平成23年4月～10月

## 5. データ収集と分析方法

1) 授業内での学生の言動を授業に参加した全教員が観察し、メモや口頭で筆者に報告されたものを、個人が特定されない形式で筆者が記録した。記録した言動の中で、学生の学びに関するものや学習に対する姿勢や気持ちが表現されたものを筆者が抽出し、一つの意味内容ごとにデータとし、内容の類似するものを分類しカテゴリ化した。

2) 毎回の授業終了後に学生が感想や質問等を自由に記載する「授業評価」の用紙に書かれた記述内容の中

から、学生の学びに関する内容や学習に対する感情・考え方・姿勢・意見について書かれた内容を抽出し、一つの内容ごとにデータとし、内容の類似するものを分類しカテゴリ化した。分析の対象にした「授業評価」は、成績確定後に研究の同意を得られた37名分である。

3) 1) と2) の結果をもとに、2年課程の看護学生の特徴を見出した。

## 6. 倫理的配慮

本研究は岐阜県立看護大学大学院研究科論文倫理審査部会で承認を得た（通知番号23-A005-1）。また、所属施設の管理者に許可を得ると共に全看護教員参加の教務会議にて承認を得た。

学生には、成績が確定した時点で、説明文書と口頭で研究目的・方法・研究の公表および研究協力を断った場合にも不利益を被ることがないことを説明した。そして「授業評価」をデータとして使用することと、授業時の学生の言動は氏名を記載せず記録したため、個人が特定されることはないことを説明した。文書で同意の意思を確認し、同意書は、学校内のポストにおいて回収した。「授業評価」は同意を得られた学生の分を、名前を伏せてコピーし、個人が特定されないように研究対象者をコード化した上でデータを記録して分析した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 授業内で教員が観察した学生の言動

授業に参加した全教員に学生の言動を観察するよう依頼し、メモや口頭で報告された内容を筆者が記録した。記録から、学生の学びに関する内容を一つの意味内容ごとに抽出して文章化しデータとした。抽出したデータは63個であった。そのデータを分類し表2にまとめた。7つのカテゴリと24のサブカテゴリを見出した。カテゴリは【 】、サブカテゴリは[ ]、観察内容例は「 」で示し、カテゴリごとに以下に説明する。

#### 1) 【自己の姿勢や技術に対する振り返り】

これは、今までの技術に対しての姿勢や考え方を学生が振り返った内容である。学生は、演習や練習場面で「今まで何も考えずに行っていた」「准看護学校では見た目にきれいなベッドを作れば良かった」と[今までの姿勢の振り返り]を行い、「普段自分が行っている技術が、

表2 授業内で教員が観察した学生の言動

カテゴリ	サブカテゴリ	観察内容例	
		「 」は学生の発言	( ) 内にどの授業で観察されたか記載
自己の姿勢や技術に対する振り返り	今までの姿勢の振り返り	「今まで何も考えずに行っていた」(車椅子移送演習・4回目) 「准看護学校では、見た目にきれいなベッドを作れば良かった」(ベッドメイキング練習)	
	自己の技術の不足への気づき	「普段自分が行っている技術が、まだまだダメだと気付いた」(車椅子移送演習) 「自分の技術が不足していることが、よくわかった」(6.7回目)	
手順を中心に援助方法を考える	経験からの方法が中心となる援助	学習した手順だけを思い出して練習(ベッドメイキング練習) 方法の工夫より段取りに関する記載をする学生がみられた(5回目)	
	正解の援助方法を求める	最初は、正解となる方法だけを質問(ベッドメイキング練習) 「正解がないから不安」(10.11回目)	
技術を習得するために必要な考え方や練習方法の理解	根拠に基づいて技術を行う必要性	「力学的根拠に基づいて行くと楽にできる」(4回目) 「根拠を踏まえるときれいにできる」(ベッドメイキング演習)	
	技術を行う考え方の理解	「理由が正しければ、自分が考えたやり方でいいと自信をもてた」(足浴・寝衣交換演習) 「患者の状況を考えて配慮すべきことがわかった」(6.7回目)	
	適切な練習方法の理解	「練習時に色々な方法を試すことが必要とわかった」(6.7回目)	
学生が学びを得た学習方法	体験からの学び	根拠を確認する体験をしたことで、驚きの声があがった(2回目) 「患者役を体験したから、よくわかった」(6.7回目) 「実際にやってみることで納得できた」(足浴・寝衣交換演習)	
	他者の意見からの学び	クラスメイトの意見に感心した声をあげた(3回目) 積極的に意見を出し合いながら演習を行っていた(4回目)	
	教員の支援による学び	教科書を一緒に読んでみるとポイントを見つけられた(2回目) 教員が例示して意見を促すと意見を広げることができた(8回目)	
成果が得られにくい学習方法	教科書や板書を写すだけの学習	事前学習は教科書を写すだけで内容が理解できていなかった(4回目) 「板書がないと何を書いたらいいのかわからない」(8回目)	
	自己流の方法での技術実施	自分独自の不適切な方法で技術を実施(足浴・寝衣交換演習)	
	妥当な根拠を考えることなく、友人からの伝達を参考	不適切な技術に「友達が、この方が良いと言ったから」と発言(足浴・寝衣交換演習) 友人が妥当だと判断した方法を自分の援助とした(10.11回目)	
学習に対する楽しさや前向きに取り組む姿勢	不十分な事前学習	事前学習を促していたが、学習をしていた学生は、半分以下であった(足浴・寝衣交換)	
	楽しい気持ち	「(安楽な体位の工夫を)自分達で考えるのは楽しい」(4回目) 「できると楽しい」と何度も練習に来た(ベッドメイキング演習)	
	出来るようになったことを喜ぶ気持ち	「きれいにできて嬉しい」(ベッドメイキング演習) 「自分の成長がわかると嬉しい」(ベッドメイキング演習)	
	仕事への活用	「仕事でも気をつけるようになった」(ベッドメイキング演習) 学んだ技術を就業先の介護職に教えている(ベッドメイキング演習)	
	他者に教えたくなる	友人の練習場面で見本を示していた。(ベッドメイキング演習)	
学習に対して困難を感じる気持ち	積極的に取り組もうとする	どのグループも積極的に意見交換を行っていた(6.7回目) 教科書や講義の内容を参考に詳細な手順書を作成した(9回目)	
	知識の活用方法がわからない	「(根拠と技術のつながりは)教員の説明で理解できた」(4回目) 既習知識の活用場面で「皮膚の機能のどこを見たら良いのかかわらない」と発言(8回目)	
	患者に合わせた援助を考えだすことの難しさ	援助の工夫を考えるグループワークでは、複数の学生が「難しい」と発言(9回目) 学生同士の援助体験では、患者の状況をイメージした技術ができない学生が複数いた(6.7回目) 手順書は一般的な留意事項が多く、患者の状況に合わせた援助の工夫が少なかった(9回目)	
	時間の不足からくる学習不足	「仕事のために練習時間がとれない」と、練習に来ない学生があった(ベッドメイキング演習)	
	言葉の理解や表現の難しさ	「記録の書き方がわからない」(5回目) 言葉の表現方法にこだわり「答え方を教えてほしい」(8回目) 課題で問われていることの意味が理解できず不適切な回答の学生が複数あった(9回目)	
	知識理解の難しさ	「力学的な根拠の理解は難しい」と発言(2回目) 既習の知識が理解できておらず、再度説明した(8回目)	

まだまだダメだと気付いた」と[自己の技術の不足への気づき]も示していた。

## 2) 【手順を中心に援助方法を考える】

これは、技術の根拠や患者の状況から援助方法を考える技術を行うよりも、自分の経験や他者からの伝達から判断した正解と思われる手順通りに技術を行おうとする学生の行動を示した内容である。[経験からの方法が中心となる援助]には、何故その方法で行うかを考えることなく、自分の記憶からただ手順を思い起して技術実施をしようとする学生の姿があった。また、環境を整える課題においても、患者の状況に合わせて工夫するよりも、物品の準備や順序など段取りに関する記載が多くみられた。[正解の援助方法を求める]では、正解となる方法だけを質問したり、正解のデモンストレーションを求めたり、「正解がないから不安」という発言がきかれた。

## 3) 【技術を習得するために必要な考え方や練習方法の理解】

これは、学生が技術を習得するために必要だと感じた考え方や習得のために必要だと感じた練習方法を理解したことであり[根拠に基づいて技術を行う必要性][技術を行う考え方の理解][適切な練習方法の理解]の3つのサブカテゴリがあった。

## 4) 【学生が学びを得た学習方法】

これは、学生がどのような学習方法の中で学びを得ることができたかをまとめた内容である。[体験からの学び]は、演習における技術実施の体験や患者役体験であり、[他者の意見からの学び]は、グループワークや授業内のクラスメイトの意見に対する反応としてみられた。[教員の支援による学び]としては、教科書を一緒に読むと理解できたことや意見が出ない時に例示すると意見が増えたことなどの学生の行動があった。

## 5) 【成果が得られにくい学習方法】

これは、教員が学習の成果が得られにくい学習方法と認識した内容である。[教科書や板書を写すだけの学習]は、教科書を写すだけで内容が理解できていないことや「板書がないと何を書いていいかわからない」という発言にみられ、[不十分な事前学習]は、指示があっても、十分な学習ができない状況があった。[自己流の方法での技術実施]では「自分独自の不適切な方法で技術を実施」することが見られ、[妥当な根拠を考えることなく、

友人からの伝達を参考]では、友人からの伝達を吟味することなく参考にして技術実施を行う学生があった。

## 6) 【学習に対する楽しさや前向きに取り組む姿勢】

これは、学習に楽しさや喜びを感じ、学習したことを活用したいと前向きに学習に取り組もうとした内容を示している。学習することで、[楽しい気持ち][出来るようになったことを喜ぶ気持ち]を感じ、[仕事への活用]をしたり、[他者に教えたいくなる][積極的に取り組もうとする]という行動があった。

## 7) 【学習に対して困難を感じる気持ち】

これは、学生が学習の中で感じる様々な困難感を表現した内容である。[知識の活用方法がわからない]では、清潔の援助において、既習の皮膚の機能のどの知識を利用して考えるべきかわからない場面や、力学的根拠を学習しても、技術と結び付けることが難しい場面などがあった。[患者に合わせた援助を考えだすことの難しさ]では、援助の工夫を考える場面で難しいと発言したことや、手順記載の課題で「一般的な留意事項が多く、患者の状況に合わせた援助の工夫が少ない」ことなどに表れていた。[時間の不足からくる学習不足]は、仕事の調整ができず、練習時間や学習時間が取れない学生の姿があった。[言葉の理解や表現の難しさ]では、記録の書き方や、発問に対する答え方を教えてほしいと訴えたり、課題で問われていることの意味が分からず、不適切な記録内容になったりする学生もあった。[知識理解の難しさ]では、活用すべき知識そのものの理解に困難を示す学生の姿もあった。

## 2. 毎回の授業後に学生が記載した「授業評価」における記述内容

毎回の授業ごとに感想や質問等を学生が自由に記載する「授業評価」の用紙の記述内容をまとめ表3に示した。「授業評価」は、記載された文章から、学生の学びや学習に対する姿勢・気持ちが書かれた内容を抽出し、内容の類似するものを分類し、7つのカテゴリと24のサブカテゴリを見出した。カテゴリは【 】, サブカテゴリは[ ], 記述内容例の一部抜粋は〈 〉で示し、カテゴリごとに以下に説明する。

### 1) 【自己の技術や考え方に対する振り返り】

これは、自己の技術や考え方を振り返った内容である。学生は、授業を受けて、[学習前の考え方の振り返り]

表3 学生が記載した「授業評価」における記述内容

カテゴリ	サブカテゴリ	記述内容例 ( ) 内にどの授業で記述されたかを記載
自己の技術や考え方に対する振り返り	学習前の考え方の振り返り	業務は流れだった (1回目) ただ目的達成していた (1回目) 患者に合わせて考えていなかった (13.14回目)
	基本技術の見直し	正しい方法を忘れがち (2回目) 忘れていたことを思い出した (4回目) 変な癖がついていることに気づいた (4回目)
	自己の技術の不足	観察が不足だった (10.11回目) 手技に集中しすぎた (10.11回目) 手技が未熟だった (10.11回目) 配慮が不足していた (10.11回目)
	自己の援助の振り返り	自分の援助技術の改善点がわかった (12回目) 改めて援助技術を考えることができた (12回目)
援助には知識や根拠の理解が必要であること	根拠の理解の必要性	「何故」と考えたい (1回目) 目的・根拠を明確にする必要 (1回目) 根拠の理解が大切 (2回目) 根拠をわかって技術を行うと楽 (4回目)
	根拠を踏まえた援助が理解できた	看護の視点で考える援助方法がわかった (5回目) 根拠を踏まえる意味がわかった (5回目)
	援助のために知識が必要	知識のなさを感じた (1回目) 援助のために関連する知識が必要である (13回目)
事例に合わせた援助の必要性と援助方法を見出す考え方の理解	事例に合わせた援助が必要	患者に合った方法を見つけることが大事 (4回目) 個別性に合わせる必要がある (8回目)
	情報を整理し活用する必要性	情報を収集する必要がある (3回目) 情報把握が必要 (5回目) 情報を活用することが大切 (9回目)
	アセスメントの必要性和方法	アセスメントのポイントや視点がわかった (8回目) アセスメントは重要 (8回目)
考えることの大切さについての理解	考えることの必要性	考えることが大事 (5回目) 多側面から考えることが必要 (9回目) 突き詰めて考えることが大切 (14回目)
	考えながら練習する効果	練習によって方法を工夫することができた (10.11回目) 練習中に考えることが大切 (10.11回目)
学生が学びを得た学習方法	グループワークによる学び	自分では考えられない意見が聞けた (3.5回目) 意見交換で、良い部分も注意する部分も指摘し合えた (4回目) 他者の意見で視野が広がった (9回目)
	体験による学び	実際にやってみるとわかりやすかった (2回目) 体験してみて患者の怖さがわかった (4回目) 患者役をやって援助の工夫の効果を実感した (10.11回目)
	指導・助言による学び	指導によって自分の技術の不足に気づけた (10.11回目) 先生の助言で改善点を発見することができた (10.11回目)
	学習の面白さ・楽しさ	事例検討は面白い (1回目) 色々な考え方が出てきて面白い (3回目) 自分とは違う考えがあることが興味深く勉強になった (3回目)
学習時に感じる楽しさや学習を活用しようとする意欲	学習できた喜び	根拠を知ることができて嬉しい (2回目) 学べて良かった (2回目) 自分が学びたいと思っていた内容だった (2回目)
	援助を考える楽しさ	自分が考えた方法が気持ち良かったと言われ嬉しかった (10.11回目) 援助を考えるのは難しいが楽しい (12回目)
	仕事・援助への活用と意欲	仕事に活用したい (1回目) 臨床でも役立つ (5回目) 広い視野を持ちたい (3回目) 力を磨きたい (3回目) 職場でも考えながら試したい (4回目)
学習時に感じる難しさ	知識理解の難しさ	技術の原理の理解は難しい (2回目) 教科書を自分で読むだけでは理解できなかった (13回目)
	言葉の理解や表現の難しさ	質問に対する自分の意見をまとめることができない (1回目) 自分で考えて文章にしていくことは難しい (14回目)
	考えることの難しさ	看護技術を考えることは難しく不安になった (1回目) 考えが妥当か判断するのが難しかった (5回目)
	事例に応じて援助を工夫することの難しさ	事例に合わせた援助の意義を考えることが難しい (8回目) 個別性のある援助を工夫することは難しい (10.11回目)
	技術実施の難しさ	技術は実際にやってみると難しい (4回目)

【基本技術の見直し】をしていた。そして、【自己の技術の不足】を感じ、【自己の援助の振り返り】をしていた。

2) 【援助には知識や根拠の理解が必要であること】

これは、学生が授業を通して、援助には知識や根拠の理解が必要であることを学習できたという内容である。技術を行うための【根拠の理解の必要性】がわかり、【根拠を踏まえた援助が理解できた】と実施時に根拠を踏まえるということの意味を理解し、【援助のために知識が必要】では〈援助のために関連する知識が必要である〉ことが理解できたことを示していた。

3) 【事例に合わせた援助の必要性和援助方法を見出す考え方の理解】

これは、事例に合わせた援助を行うために必要なことは何かということを学生が理解できたという内容である。【事例に合わせた援助が必要】では、患者に合った方法の大切さを理解し、そのために【情報を整理し活用する必要性】や【アセスメントの必要性和方法】などの援助方法を見出す考え方を学習できたことを示していた。

4) 【考えることの大切さについての理解】

これは、学習の過程で考えることの大切さを理解することができたという内容である。【考えることの必要性】として〈多側面から考えることが必要〉や〈突き詰めて考えることが大切〉があった。また、【考えながら練習する効果】も感じていた。

5) 【学生が学びを得た学習方法】

これは、学生が気づきや学びを得たと記載した学習方法を示している。【グループワークによる学び】では、他者からの意見による視野の広がりなどを感じ、【体験による学び】では、〈実際にやってみるとわかりやすかった〉〈患者役をやって援助の工夫の効果を実感した〉などの学びがあった。演習においては、教員による【指導・助言による学び】もあった。

6) 【学習時に感じる楽しさや学習を活用しようとする意欲】

これは、学生の学習に対する楽しい、面白いなどの気持ちとそこから発展する学習を活用しようという意欲を示している。【学習の面白さ・楽しさ】では、〈色々な考え方が出てきて面白い〉、【学習できた喜び】では、〈根拠を知ることができて嬉しい〉などがあった。また【援助を考える楽しさ】として、〈援助を考えるのは難しいが楽

しい〉があり、【仕事・援助への活用と意欲】では、〈仕事に活用したい〉〈臨床でも役立つ〉と考えていた。

7) 【学習時に感じる難しさ】

これは、学習時に感じる学習の困難さに関する記載を示している。【知識理解の難しさ】として〈技術の原理の理解は難しい〉や〈教科書を自分で読むだけでは理解できなかった〉があった。【言葉の理解や表現の難しさ】では、質問を理解して自分の意見をまとめることや課題において自分の考えを文章で表現することなどに困難を示した。【考えることの難しさ】では、看護技術を考えることに難しさを感じたり、考えが妥当か判断することに難しさを示した。【事例に応じて援助を工夫することの難しさ】では、事例に合わせた援助の意義や個別性のある援助を考え工夫することに難しさを示し、【技術実施の難しさ】もあった。

### 3. 2年課程の学生の学びの特徴

授業内で教員が観察した学生の言動（以下「言動」と表記）と学生が記載した「授業評価」における記述内容（以下「授業評価」と表記）から見出された各7つのカテゴリに関連するものに分類し、そこから2年課程の看護学生の学びの特徴を4つ見出し、表4にその分類を示した。以下に特徴ごとに説明をする。

1) 手順を中心に援助方法を考えたり、成果が得られにくい学習方法が目立つが、学習過程で振り返ることができる

「言動」において【手順を中心に援助方法を考える】や【成果が得られにくい学習方法】に准看護師課程の教育に影響を受けた学生の特徴がみられたが、学習の過程で、自分の考え方や取組みの姿勢などが良くなかったことに気づき、振り返りをする学生の姿が「言動」にも「授業評価」にもみられたため、振り返りをするができることも学生の特徴とした。

2) 学習に対して様々な困難を感じる

「言動」にも「授業評価」にも多くの学習時の困難を示していた。それぞれのサブカテゴリから、知識の理解と共に活用も困難であること、言葉の理解や表現に対しても困難さがあり、援助方法を考え出す場面でも難しさがあるという特徴が見出された。

3) 学習の成果を得ることができ、学習過程で楽しさを感じ、学習への意欲を持つ

表4 授業内で教員が観察した学生の言動と学生が記載した「授業評価」における記述内容から見出した2年課程の看護学生の学びの特徴

特徴	授業内で教員が観察した学生の言動	学生が記載した「授業評価」における記述内容
手順を中心に援助方法を考えたり、成果が得られにくい学習方法が目立つが、学習過程で振り返ることができる	【自己の姿勢や技術に対する振り返り】 【手順を中心に援助方法を考える】 【成果が得られにくい学習方法】	【自己の技術や考え方に対する振り返り】
学習に対して様々な困難を感じる	【学習に対して困難を感じる気持ち】	【学習時に感じる難しさ】
学習の成果を得ることができ、学習過程で楽しさを感じ、学習への意欲を持つ	【技術を習得するために必要な考え方や練習方法の理解】 【学習に対する楽しさや前向きに取り組む姿勢】	【援助には知識や根拠の理解が必要であること】 【事例に合わせた援助の必要性と援助方法を見出す考え方の理解】 【考えることの大切さについての理解】 【学習時に感じる楽しさや学習を活用しようとする意欲】
特定の学習方法に対し、特に学ぶことができたと感じる	【学生が学びを得た学習方法】	【学生が学びを得た学習方法】

学生は「授業評価」に多くの学びの内容を記述し、「言動」においても【技術を習得するために必要な考え方や練習方法の理解】が学びの成果としてみられた。これらの成果を得る過程においては「言動」でも「授業評価」でも楽しいという気持ちが示され、学習の活用や学習への前向きな取り組み姿勢がみられた。これらの反応から、学習への意欲が高まったと考えられたため、それを学生の特徴とした。

#### 4) 特定の学習方法に対し、特に学ぶことができたと感じる

「言動」においては、体験からの学びや他者の意見や教員の支援による学びに反応があった。「授業評価」においては、グループでの意見交換や体験演習においての気づきや学びが繰り返し表現されており、体験や他者の意見からの学びなど特定の学習方法に、特に関心を示す学生の特徴がみられた。

## IV. 考察

試行的な授業の中で得られた2年課程の学生の学びの特徴を、授業の成果も含めて考察し、2年課程の学生に必要な教育について検討した。

### 1. 准看護師課程で身につけた考え方や学習姿勢の見直し

学生の言動や「授業評価」からは、手順を中心に援助方法を考えたり、成果が得られにくい学習方法をするという特徴があった。しかし、学習によって、手順ばかりに目が向き技術を実施する際に考えていなかったことを

振り返ることができた。准看護師教育において、短時間で技術の型を覚える学習をしてきた上に、未熟な技術で日常的に業務として援助を行っていると、「准看護師として現場で求められてきたことが影響し、患者に合わせた看護を考えることよりも、業務を確実にこなすことを優先してしまう」(末永2011) こととなる。しかし、看護師となるためには、患者の状況から適切な援助方法を判断することが求められるため、まずは根拠に基づいて考える必要性を感じ、考える習慣を作ることから始める必要がある。試行的な授業では、根拠を踏まえて援助技術を考えていくことの必要性を繰り返し意識づけた。この授業によって、学生は、技術には知識に基づいた根拠が必要であることを理解し、考えることの必要性に気づいていった。看護学校入学後の早い段階に、考えて技術を行う習慣を身につけられるように働きかけることは2年課程の学生の思考力を高める教育として重要な点であると考えられる。但し、学生に考えさせる機会を作っても、【成果が得られにくい学習方法】に見られたように、経験や他者の伝達に頼るような学習方法では、思考力を高めることができない。自ら調べ、理解し、考える学習を行う必要があると考え、試行的な授業では、考える発問を行い、教科書を調べるよう促したり、教科書を一緒に見て考えて学習するように教員が繰り返し指導した。これによって学習姿勢が変化した学生もみられたが、授業の後半になっても他者の判断に頼る学生もあった。主体的に調べ考える学習方法が定着するように、自主的に取

り組める課題を提示したり、考えながら技術を実施する練習などを継続的に指導する必要がある。

## 2. 学習上の困難に対する支援の必要性

2年課程の学生は様々なことに困難を感じるという特徴がみられた。学生が感じる学習上の困難には、知識の理解と活用、言葉の理解と表現、援助を創造的に考え実施することなどがあつた。援助を考え実施することに困難さがあることは、取組み以前の状況からも予測されたため、考える過程を明確に示し、よりわかりやすく説明することを計画した。練習場面では、教科書を一緒に見ながら技術と根拠の結びつきを説明したり、既習学習を想起させながら知識の理解を深めるなどの指導を行った。それでも、知識の活用や文章表現について難しさを訴える学生があり、十分な指導ではなかったことがわかつた。今回の取組みで、知識理解のみならず知識の活用や言葉の理解・表現などにも困難さがあることが明らかとなつたため、このような学生には、知識の活用の仕方をより具体的に示したり、言葉の理解や文章表現などについても丁寧にゆつくりと学生の反応を見ながら学習を進める必要がある。しかし、丁寧な支援には時間を要する。2年課程のカリキュラムは、准看護師としての知識があるという前提で組まれているために授業時間数が限られている。そのため、全ての項目を網羅するのではなく、授業内容を精選し、他の項目にも応用できるような考え方や学習方法を身につけることを重視する必要がある。

## 3. 学習意欲を高め、学習を活用できるようにする支援

3番目の特徴として、学習の成果を得ることができ、学習過程で楽しさを感じ、学習への意欲を持つことがみられた。日常的に看護業務に携わっている2年課程の学生は、学校での学びが、自分の仕事に即活用できることが、学習の面白さや楽しさにつながり、学習への意欲を高め、前向きな姿勢をもつようになっていた。また、今まで知らなかった知識を理解したことや援助を考えることそのものに面白さを感じる学生もいた。

吉田(2009a)は、2年課程の学生は、「職場の実践と学校における学習内容の乖離と統合という特徴」を示し、「講義を受けながら、職場における自分の看護を想起させ自己との対話を行う『看護実践の省察』」(吉田ら, 2009b)を行っていることを述べている。学校での学習と職場の実践が乖離した場合には、単なる知識に留まり

学校での正答を求めることにもつながるが、乖離せず活用できると知ることは学習への意欲につながる。そのため、2年課程の教育においては、より臨床における看護実践を意識した教育が必要である。臨床での具体的な活用方法がイメージできるような技術の教授方法や、学生が経験する可能性の高い状況を踏まえた事例を取り上げるなどの指導方法を工夫することで、学校での学習意欲が高まると考えられる。

## 4. 働きながら学ぶ学習者であることを意識した学習方法の工夫

学生は特定の学習方法に対し、特に学ぶことができたと感じる特徴があり、体験や他者からの意見を聞くグループ学習におけるの気づきや学びが大きいことが繰り返して表現されていた。グループ学習は、「広い範囲の経験や知識を集めることができ、問題解決により多くの提案をすることができる」学習形態である(辰野,1973)ため、看護基礎教育では、多くの場面でグループ学習が取り入れられている(芳賀ら,2007)。三木ら(2010)は、2年課程定時制の学生の研究において、「就労学生は未就労学生に比べて社会的スキルが高く」他の人の技術や態度をモデルとして取り入れようとする学習行動と関連していたことを述べている。働きながら学ぶ学生は、日常的に他者から学ぶ経験も多く、他者からの学びを有用とする傾向にあることから、グループでの意見交換や演習は効果的である。但し、場合によっては、無批判に他者の意見を取り入れることもあるため、効果的なグループ学習となるように教員の支援が必要である。

また、体験学習は、学習者の感性に直接に働きかけ、学習者自身の「気づき」や「興味や関心」を引き起こすものである(寺西,2001)。また、実験的な体験学習は技術学習において有用であり(深井,2010)、授業では、実際に様々な方法を行って技術の根拠を確かめ、根拠を意識しながら技術実施をすることの重要性を強調した。この学習を通して、根拠を知っていれば、手順の順序や方法が異なっても修正や調整が可能であることを理解できた学生もあつた。更に日常的な業務も学生にとっては体験であるが、看護の学習に有用な体験であると意識していないために学習体験とはなりにくい。しかし、技術を学習する中で、普段の業務を教員と共に省察する機会を作ることで、技術の意味づけをしたり、振り返りの

視点がわかるようになると、日常的な体験からの学びも得られると考えられる。実務を行いながら学ぶ学生であることを意識して、自ら振り返りを行う方法を身につけられるように教員が支援していく必要がある。

## V. 研究の限界と今後の課題

今回見出した2年課程の学生の学びの特徴は、意図的に試行した授業の中で見出されたものであり、ある程度の傾向は見出されたが、2年課程の学生の一般的な学びの特徴とすることには限界がある。今後は、これらの特徴を踏まえて、様々な授業において思考力を高めるという視点で教育方法の工夫を行いながら学生の反応を得ていくことで、より2年課程の学生に適した教育方法が見出せると考える。

## 謝辞

本稿は、平成24年度岐阜県立看護大学大学院看護学研究科修士論文の一部をまとめたものである。本研究に取り組むに当たり、研究への協力をして頂いた皆様に心より感謝いたします。

## 文献

- 深井喜代子. (2010). 看護技術とは, 新体系看護学全書 第11巻 基礎看護学② 基礎看護技術 I (第2版)(p.8) メヂカルフレンド.
- 芳我ちより, 舟島なをみ. (2007). 学生間討議を中心としたグループ学習における教授活動の解明—看護基礎教育における展開される授業に焦点を当てて—, 看護教育学研究, 16(1), 17.
- 林千冬. (2009). 准看護師制度問題. グレグ美鈴, 池西悦子(編), 看護教育学(pp.85-88). 南江堂.
- 肥後すみ子, 川内房子, 高橋紀子, 他. (1995). 准看護婦教育での基礎看護技術習得状況と2年課程の教育上の課題, 看護教育, 36(8), 741-747.
- 門脇豊子・清水嘉与子・森山弘子(2012a). 看護師等養成所の運営に関する指導要領について 別表4 看護法令要覧(平成24年度版)(pp.116-117). 看護協会出版会.
- 門脇豊子・清水嘉与子・森山弘子(2012b). 看護師等養成所の運営に関する指導要領について 別表3-2 看護法令要覧(平成24年度版)(p.112). 看護協会出版会.
- 金城やす子, 小島洋子, 片川智子. (2003). アセスメント能力に

- そった実習指導のあり方—事例展開による3年課程・2年課程のアセスメント能力の評価—, 第34回看護学会論文集 看護教育, 121-123.
- 厚生労働省. (2012). 第101回看護師国家試験合格状況. 2012-7-30. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200000267jc-att/2r985200000267l2.pdf>
- 松本富士. (2010). 2年課程における基礎看護技術の構成要素による視点の明確化, 看護人材教育, 7(2), 114-122.
- 三木隆子, 柳澤真由美, 河村恵里子, 他. (2010). 2年課程定時制看護専門学校生の社会的スキルと領域看護学実習における学習活動の関連, 第41回 看護学会論文集 看護教育, 170-173.
- 日本看護協会出版会(編). (2012). 平成23年 看護関係統計資料集(pp.34-35). 日本看護協会出版会.
- 末永真由美. (2011). 看護実務経験のある2年課程の看護学生が臨地実習で行う看護ケアに影響を与えている要因, 日本看護学教育学会誌, 21(2), 35-43.
- 鈴木せん, 富岡美和, 鬼沢和美, 他. (2001). 2年課程看護学校における学生の清拭技術習得度の実態と課題, 看護展望, 26(8), 106-111.
- 高橋恭子. (2001). 体験演習がもたらす学習効果—2年課程における学生の思考を揺さぶる学習—, 第32回看護学会論文集 看護教育, 65-67.
- 高井裕美, 濱田由佳, 神谷利恵, 他. (2001). 2年課程における積み重ね教育としての看護技術の授業, 第32回看護学会論文集 看護教育, 164-166.
- 辰野千壽. (1973). グループによる問題解決, 問題解決の心理学 (2版)(p.301). 金子書房.
- 寺西和子. (2001). 体験学習. 日本カリキュラム学会(編) 現代カリキュラム事典(p.340). ぎょうせい.
- 山内洋子, 我謝美知子, 金城靖子, 他. (1997). 看護婦2年課程(全日制)における日常生活援助技術の授業展開, 看護教育, 38(5), 377-380.
- 吉田幸枝. (2009a). 看護技術修得過程における2年課程学生の経験, 看護展望, 34(8), 51.
- 吉田幸枝, 新井広子, 岩崎昌代, 他. (2009b). 2年課程看護学生の講義・演習における学びの特徴, 看護展望, 34(8), 52-56.
- 吉田幸枝, 伊藤佳代子, 諏訪由美子, 他. (2009c). 2年課程学生の看護実践能力の強化とは, 看護展望, 34(8), 44-46.

(受稿日 平成25年 9月 2日)

(採用日 平成26年 1月15日)

## **Learning Characteristics of Nursing Students in a Two-Year Course: Student Responses in a Trial Class for Enhancing Thinking Ability**

Mari Okada<sup>1)</sup> and Ritsuko Hattori<sup>2)</sup>

1) Tono Nursing School

2) Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

### **Abstract**

The aims of this study were to identify the learning characteristics of nursing students in a two-year course, and to consider education methods by examining the students' responses in a trial class for enhancing their thinking ability.

In a basic nursing class that teaches skills for daily life assistance, we prepared some techniques for enhancing the independent study and research skills of students and developing their capacity to consider nursing care on the basis of scientific evidence. We extracted information on the students' approach and attitude toward learning and study as reported on class evaluation forms, in which the students could freely write down their impressions and questions after each class, and as noted by teaching staff who observed the students' behavior in class. The data were then compiled, categorized by similar content, and analyzed.

We identified seven categories from the information reported on the class evaluation forms and from observations of students' behavior in class. From these categories, we then identified four learning characteristics of the students, and considered education methods corresponding to these characteristics.

The first characteristic is the notable tendency for students to consider nursing care methods with an emphasis on the procedures they have experienced and to take approaches to learning that were not effective at achieving good results. However, they could also reflect on their learning and experience during their studies. Students therefore require guidance on proper study methods and an adjustment to their way of thinking during the initial period after enrollment in the course.

The second characteristic is that students struggle in various ways in regard to learning. This necessitates continuous and careful guidance over time to assist students in comprehending and applying the knowledge acquired in class and in understanding terms and expressions.

The third characteristic is for students to obtain results from learning and to enjoy the process, which motivates them to study. Education methods that focus more on clinical work are recommended for students to ensure that they can consistently apply this characteristic in their learning.

The fourth characteristic is for students to use specific study methods, by which they feel that they have studied particularly well. Group learning and practical study techniques have a significant impact.

Many of the nursing students in the two-year course tend to learn actively, and the adult students in this course have highly developed social skills. Therefore, effective education methods for these students are learning by observing others and learning from firsthand experience.

**Keywords:** two-year course, basic nursing education, skills for daily life assistance, thinking ability, education methods